



ASLE-Japan / 文学・環境学会

# NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

July. 15, 2000, No. 9

ASLE-Japan / 文学・環境学会

## 第6回全国大会のお知らせ

秋の全国大会が京都で開かれます。研究発表は日米英仏関係の6名、研究発表第3部<世界各地の多様な環境文学>は役員会での提案に沿った新企画です。シンポジウムの主題は「国立公園の自然と里山の自然」、また特別講演には長良川河口堰運用開始後5年目にあたりアウトドアライターの天野礼子氏をお迎えします。恒例のエクスカージョンは比叡山を目指します。皆様のご参加をお待ちしています。

場所：京都教育文化センター

(〒606-8397 京都市左京区聖護院川原町4-13 Tel: 075-771-4221 Fax: 075-771-4224)

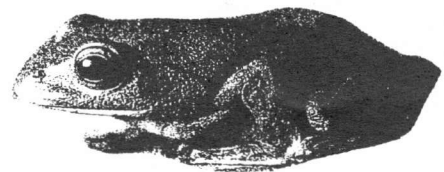
日程：2000年10月15日(日)～16日(月)

16夕～17日(エクスカージョン)：比叡山やま歩き

16日 閉会の後、大原に移動し一泊、翌朝、比叡山に登ります。

### プログラム概要

10月15日(日) 午後1:00 受付開始  
1:30 開会  
1:40--2:10 総会



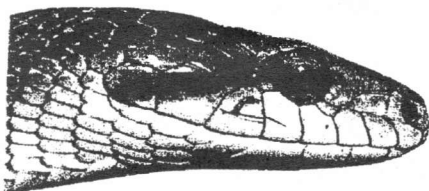
シユレーゲルアオガエル

研究発表第1部 2:10--4:09

- (発表1) 松永京子 「Leslie Marmon Silkoの作品にみるアメリカ南西部」
- (発表2) 高橋 勤 「墮落の地としてのアメリカ----18世紀アメリカにおける自然表象とナショナルリズム----」
- (発表3) 若松美智子 「J. M. Synge と自然--反キリスト教的価値の探究」

研究発表第2部 4:25--5:44

- (発表4) Edward Haig 「環境言説の批評的分析に対する体系機能文法の応用」 (The Application of Systemic-Functional Grammar to the Critical Analysis of Environmental Discourse)



アオダイショウ

- (発表5) 高橋昌子 「虫から見える宇宙と私----尾崎一雄の作品とネイチャーライティング」

懇親会 6:00--8:00

\*\*\*\*\*

10月16日 (月)

研究発表第3部 9:00—9:40—世界各地の多様な環境文学—

(発表6) 篠田知和基 「フランスの環境文学と自然観」

シンポジウム 10:00—12:00 司会:加藤 貞通

### 「国立公園の自然と里山の自然」

報告1 「アメリカの国立公園と日本の国立公園」

加藤 則芳 (アウトドアライター)

報告2 「日本近・現代文学における里山」

米村 みゆき (日本学術振興会特別研究員、日本近・現代文学)

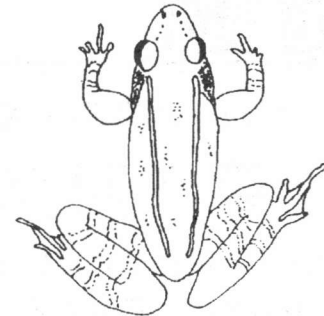
報告3 「社会経済的観点から見た野性的自然と生活圏の自然の今後」

岡島 成行 (青森大学教授、日本環境教育フォーラム常務理事)

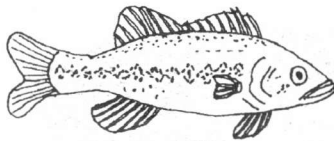
特別講演 午後1:30—3:00

天野 礼子 (アウトドアライター)

### 「環境保全運動と書くことについて」



ニホンアカガエル



ブラックバス



ヨシノボリ Rhinogobius brunneus



ブルーギル

閉会 3:05

11頁を除いて全頁、イラストはケビン・ショート著『ケビンの里山自然観察記』(講談社)より

EXCURSION TO OHARA & MT. HIEY: (16日夕) 大原泊— (17日朝) 比叡山やま歩き

エクスカーションの申し込み先: 別紙の案内をご参照ください。

(郵便でどうぞ)

(大会問い合わせ先)

西村頼男

加藤貞通 E-mail: h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp Tel /Fax : 052-789-4188

## ISLE編集過程にみる 研究者、教師、そして出版社との関係

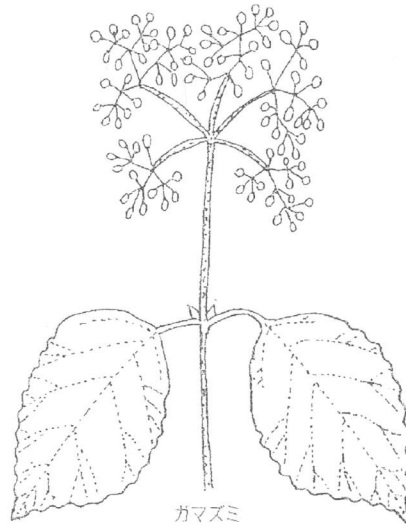
山城 新 (ネヴァダ大学リノ校大学院)

アメリカでのネイチャーライティング関連の研究はますますその幅を広げている。1998年12月のサンフランシスコMLA定例会で「エコクリティシズム」についてのセッションが設けられたのを皮切りに、99年にはPMLAや*New Literary History*などの知名度の高い学術誌でエコクリティシズムの特集が組まれた。掲載されている研究者らを一瞥してみてもお気づきになると思うが、これまでこの分野で先導的な役割を旺たしてきた研究者に加えて、更に米文学の分野でも著名な研究者たちがエコクリティシズムの方向性を論じている。もちろん中にはこの分野の趨勢を批判的に見る研究者もいるが、全体的に論文の語気から受ける印象は、ネイチャーライティングそしてエコクリティシズム研究が米文学研究の中でいよいよその存在感を増しているということであろう。

その傾向はもちろんネイチャーライティング、エコクリティシズムを含めた環境関連の活発な出版状況をみても明らかである。この分野関連のアンソロジーは大学テキスト用あるいは一箱読者への概説書として、トピック、ジャンル、時代、あるいは地域腹に様々な観点から再編されているし、復刻版などが刊行されると、それと同時進行的にその批評論文集やその作家のシリーズ物などが刊行し始める。そして何よりも、次から次へと新人作家による作品が出版され、常に新しい作品が本屋の「ネイチャー」コーナーを賑わせている。アメリカの出版業界は大手の出版社によって市場を操られてはいるが、ネイチャーライティングに関して言えば、中小規模の出版社（例えば「Island Press」、「Milkweed」等）や大学出版社が研究者（専ら大学研究者）と密接な関係を結びながらこの分野を盛り上げているといえる。では今回は、この分野の研究者や教師と出版社の関係について、ISLE (*Interdisciplinary Studies in Literature and Environment*)の役割を説明しながらその舞台裏を簡単に紹介してみたい。

ISLEはご存知の通りネバダ大学リノ校のスコット・スロビック教授 (Scott Slovic) の運営するCEAH (Center for Environmental Arts and Humanities)

を本拠地としたASLE-US (Association for the Study of Literature and Environment)の機関誌であるが、このISLEの編集と出版の過程は主に編集部と書評部に分かれて機能している。編集部は編集主任を現在ネバダ大学博士課程の学生のスーザン・ルーカス (Susan Lucas)が勤め、その下で更にこの大学の院生がボランティアで原稿の校正やレイアウトを担当したりする。書評部はマイク・ブランチ教授 (Michael P. Branch)が書評の編集とISLE巻末の文献リストの作成を取り仕切り、その下で同様に院生がボランティアで書誌情報を加えたり、文献目録を整理してデータベースに入力したりする作業を行っている。スロビック教授の元に送られてくる原稿は一年でおよそ100-150冊だそうで、同様に、一年に書評部で扱うネイチャーライティング関連の出版物は大まかに言って50-80冊。単純に言ってそれだけの情報がここにあるのだ。



具体的にもう少しISLEへの情報の流れをいかついで説明しよう。スロビック教授がディレクターを勤めるCEAHは積極的にあらゆるネイチャーライターや研究者をキャンパスに招聘し、あらゆるイベント (Great Basinブックフェスティバルや例えばNorth American Interdisciplinary Conference on Environment and Community等の学会) を主催、支援し、リノをネイチャーライティング研究に留まらない、大きな学際研究機関として盛り上げている。CEAHが支援するイベントは大学の書店が中心となり、他の出版社や大学にスポンサーを依頼し、積極的に招聘される作家や研究者の出版物を揃えて聴衆に宣伝し販売する。このような「流れ」によって、更に情報は必然的にリノに集まってくるようになるのだ。書評部のブランチ教授はほぼ全ての書誌情報誌や新刊情報誌に目を通し、この分野に関係のありそうな本があれば、直接その出版社にISLEの書評用に送ってくれるように依頼する。その結集集まった書籍が巻末にに掲載されている書誌情報なのだ。

もちろん、研究者や作家や出版社が直接ISLEでの書評用に新刊を送ってくる場合もあるが、いずれにせよ、こうやって送られてきた本は今度はすべて院生によって書誌情報を加えられ、ISLEに掲載される。それだけに留まらず、書評部は最後に

それぞれの掲載された書評を全てコピーし、その出版社にISLEの掲載例として（あるいは証拠として）手紙で謝辞を添えて送付する。数ヶ月ごとにこのサイクルが続けられると、自ずと出版社の方から積極的に出版情報を送ってくるようになるというわけだ。このようにして集められた書誌は"ISLE 図書"としてブランチ教授のオフィスに所蔵され、書誌情報はコンピューターに保存、整理されて、学生やまたはASLE-USのデータベース用に更に利用される仕組みである。もちろん書籍に限らず、ジャーナル、ニューズレター、ビデオ類なども同様にISLE 書評部の管轄の下、整理保存されている。因みに最近のASLE-US Newsletterでの出版情報もISLE書評部のデータベースからのものである。

この「流れ」の利点はいくつかある。まず、学生がボランティアで働く事によって学生自身が現場での経験を培う事が出来るということである。ISLEの編集の過程において、出版社や作家と直接に関係をもちながら現場を体験し、研究者として実践的な能力を高めていくだけではなく、就職の際に有利な経験になるのである。更に、出版社と関わりを持ち、「コネ」を積極的につくることで、それぞれの論文なり研究なりを出版する機会が生まれてくることも重要な利点である。

出版社を知ることで、その出版社がどのような分野に興味を持っていて、どのような読者層を持つかが分かってくるし、その出版社の性質が分かれば出版の機会は自ずと増えてくる。ブランチ教授が積極的に出版社との繋がりをつくる過程は上述したが、出版社自体も研究者や教師と積極的に接触することで将来のマーケットの動きを占うことが出来るのであり、いわばこれは一つの共存的な関係である。

このように、アメリカのネイチャーライティングは研究者、教師、出版社の協力関係によって支えられているとも換言できよう。もちろん、環境作品を扱うからと言って、それは必ずしも環境問題の一つの大きな原因でもある人間の「消費活動」から免れるものではない。環境をただ素材として扱うことで研究者や出版社が環境を単に「商品」として扱う危険性も否めない。しかし、研究者、教師、そして出版社などの企業団体それぞれが、環境問題という一つのテーマに向けて全体的に、協力しながら働きかけていくことはこの分野の持つ一つの希望のように思える。

## 1999年度 ASLE-JAPAN第5回全国大会を終えて

近江満里子（東京工科大学非常勤講師）



ミンミンゼミ

紅色の萩の花が咲いている。足元の石畳にはもう花びらが吹き寄せられていて、見上げると、まだ緑色の葉の間からプラタナスの実

が黄色くなり始めているのがわかる。聞こえてくるのはセミしぐれとコオロギの鳴き声だけ。

夏の余韻と秋の訪れを同時に感じさせる立教大学武蔵野新座キャンパスで、ASLE-JAPAN第5回全国大会が開催された。今大会の特筆事項は、初のASLE-JAPAN単独開催が試みられた点である。いったいどのくらいの人数が集まるだろうか――期待と一抹の不安をいだきつつ、最後の準備に入る。

大会3日前。準備会場へ足を踏み入れると、大学院生たちが各々筆を手にして白紙の一点をじっと見つめ

ている。近寄りたいたい。なるほど、自然との交感をめざすASLE-JAPANの大会は、精神統一から始まるのかと感心していると、書くのは名前ばかり。掲示物の準備の真っ最中なのだった。いつもそうだが、今回もボランティア大学院生の方々が最初から最後まで大活躍することとなる。

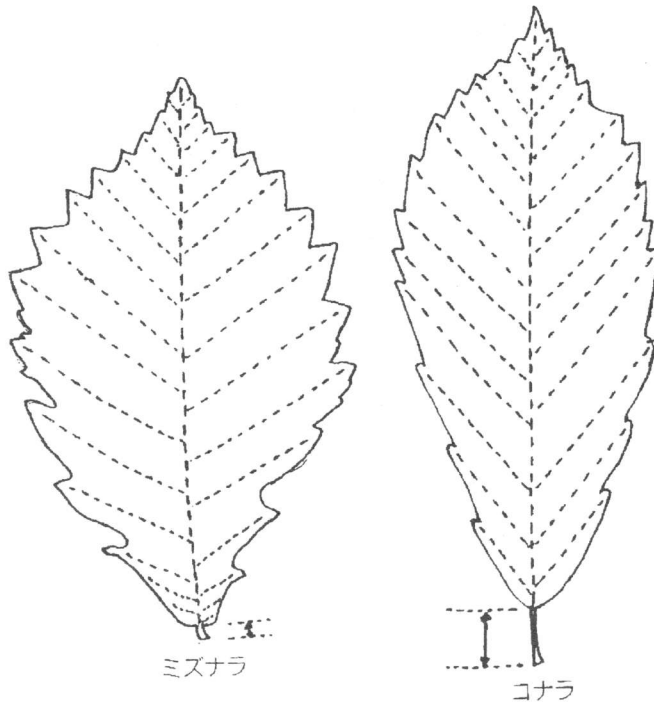
大会前日。ととろの森エクスカッション付きの学会なんてASLE-JAPANだけだ。担当者は小谷一明氏。コースが5キロから2キロに短縮されたにもかかわらず、（私を含め）猛暑の中を歩き通す自信がなくてあきらめた人が多かったのがなんとも残念。翌日、参加者からの嬉々とした報告を聞くと、やはり行けばよかったと悔やまずにはられない。

大会初日。総会に続いて小林忠好氏と塩田弘氏の発表が行われる。そして三木卓氏の講演。三木氏の個人史にそって、昆虫との出会いを中心としたストーリーが次々に展開される。幼少時に父親

## トトロの森でネイチャーゲーム&amp;散策

-----第5回大会エクスカーション企画-----

赤嶺玲子



映画『となりのトトロ』が私は好きだ。2人の姉妹が田舎の学校に転校してくる。その里山にはトトロ—森の精ともいえるが、妖精的な優雅なものではなく、太っている、というかほとんど球状の巨大なネズミのようないきものである—が住んでいる。幼く無邪気な妹の方は自然そのものという感じで、何の違和感もなくトトロとの遭遇を果たしている。印象的なのは姉がトトロと出会う場面だ。学校帰りに雨に降られて、ほこらで妹と雨宿りをしていた姉に、同級生の男の子が無理やり傘を手渡して雨の中を走り去ってしまう。傘をさし、バス停でバスを待っている間に眠ってしまった妹をおぶって、さらに遅いバスを待ち続ける。雨音だけがとぎれなく響き、その雨音に意識が同化したようになったとき、トトロがとなりに立っている(6頁へ)

がファール昆虫記を読んでくれたこと。夏の日、裸足で赤土の上を蝶を追って歩いたこと。勤めをやめたら、それまで遠ざかっていた虫たちへの興味がよみがえってきたこと。自分自身の体験をも重ねながら三木氏の講演に聞き入っていると、いつのまにか氏から問題を提示されていることに気が付く。一つの風景を見てその中に何があるかを読みとろうとする—自然と人工をあわせもつ風景から、現在の日本を読みとろうとする—そのような能力をもつことが、その人の人生の充実、豊饒につながるのではないだろうか。氏は続けて語る。今日も帰ってくるまでの間にアリをふみつぶしていたかもしれない、そのことを意識することが大事ではないだろうか。「共生」という概念が新鮮なイメージに満ちた具体例によって示されて、聞く側はその個々のディーテイルをそれぞれ心の中で反芻し始める。自分で見たものを自分の文章でできるだけ再現したい、誇張のない文体で身の回りを捉え、自然観がにじみ出るように書きたい。そう語られる三木氏の信念は、そのまま聴衆の課題となっていく。

そして、お待ちかねの懇親会。が、実はその日アルコール類をエンジョイできたのは奇跡に近かったという事実を知る人は少なかつたはずである。「今回だけ特別にOKとなりましてね。みなさんラッキー

なんですよ。」なんでも立教大学キャンパス内ではアルコールの摂取は御法度。会場となったチャペル会館のみ、まだ規則が確立していないとかで許可があり、その結果我々が懇親会は立教の歴史に残る大イベントとなったのである。さらに、北陸の城下町から「女性会員の皆さん、ボクのことを忘れないで下さい！」という熱いメッセージも届き、実に盛り上がったこと！ また今回は、出席者全員による自己紹介もあり、家庭菜園での虫との近接遭遇など、思いがけない体験談が多数披露された。

さて気分も新たに大会2日目。午前中は阿部治、伊藤詔子、岡島成行各氏の発題及び稲本正氏司会による討議。大学教育における環境教育をめぐる歴史や問題点などが提示された。午後は「幻想としての自然」というタイトルにて大神田丈二氏の司会のもと、生田省悟、石井倫代、野田研一各氏によるシンポジウム。

出席者数が気になる今大会であったが、3日間をふりかえてみると多くの方々のご協力に支えられて盛会となったと言えよう。ほっとして会場を出ると、相変わらずセミの声が聞こえ、萩の枝が風にゆれている。エレベーターの中に入り込んでいた太ったコオロギは無事外へ出られただろうか。

ことに気づくのである。笑いをかみこころしたようなすまし顔で。姉ははじめ自分の目を疑うが、この存在を驚きや喜びや楽しさとともに受け入れる。姉妹がネコのバスに乗って空を駆けめぐったり、植えた木がどんだんのびていたり、この映画はエコロジカルに快い視覚的イメージ世界である。

私たちが訪れたトトロの森は、西武球場前駅から市街地を15分ほど歩いた所にあった。去りゆく夏を惜しむように、ツクツクボウシが森中に声をりんりと響かせていた。その声に混じって、学校のチャイムらしき鐘の音がかすかに聞こえてくる。秩父連山へ連なる狭小丘陵に広がるトトロの森は、『となりのトトロ』に象徴されるような里山の自然の宝庫なのだというキャッチフレーズも、この場所に実際に立ってしまえばたしかにうなずける。森の入口近くのテーブルやベンチに荷物を置き、エクスカッション担当の小谷さんをはじめ9人の参加者は輪になってネイチャーゲーム講師、降旗信一さんの言葉に耳を傾けた。「ネイチャーゲームは、アメリカのナチュラリスト、Joseph Cornellによって発表されたSharing Nature With Childrenをベースに創られています。森を散策しながらいくつかのアクティビティを通して5感を使い、楽しみながら自然との一体感を感じてみましょう」降旗さんにはこやかに語る。

その場で最初のアクティビティである、「アイスブレイク」と呼ばれる参加者同士の自己紹介と、自然体験の語り合いに入っていた。小松さんは、さまざまな木や花の名前を驚くほどよく知っていた。幼い頃は東京もこんな自然でいっぱいだったけれど、それが壊されるのはすごく速かった、と教えてくれた。それから降旗さんの合図に従って、池の方へと皆で歩き始めた。岩政さんは歩きながら、葉を茂らせて道端に立つ木を指さして、「あ、うるしの木だ。子どもの頃、この枝を折って、子ども同士で相手を枝でえーいとたたき合ってたよ」とのびやかな声で話していた。

蝉の声が森中にこだましていた。木々のにおいや、森全体が発する気に心地よく包みこまれているように感じた。池のほとりに皆で腰をおろした。聴覚や視覚といった感覚をときずまずアクティビティとして、「音いくつ」「サウンドマップ」についての説明があった。座ったまま1分間目をとじ、音がいくつ聞こえるか数えた。蓉、飛行機、葉を揺らす風、池の水蔓をたたくトンボの羽の音など、4つから8つほど挙がった。それから各自好きな場所に散って、どの方向からどんな音が聞こえてくるかを絵にするサウンドマップを描いた。しばらくして、皆集まってサウンドマップを見せ合った。林さんは、池を中心にして水面

に波紋が広がるようなデザインの、丹念で素敵なサウンドマップを見せてくれた。

池のほとりから離れて、森の小径へ場所を移した。「カモフラージュ」というアクティビティは、小径にそって前もって降旗さんの助手の方が準備した、自然の中に隠れた人工物を見つけて数えるというものだった。草の上に小さなあいぐるみのトトロがいる。私たちは笑いながらひとつ、と数えた。ビニール製のつたの葉やぶどうの実、木から落ちたいがぐりに混ざって置かれた特大サイズの人工いがぐりなど十数個見つけていったが、皆で何度探しても見つからないものがひとつあった。土の上の安全ピンだった。

「サイレントウォーク」は、特定の区間をゆっくり、話をせずに歩き、おもしろい動物がいたら親指を、植物なら人指し指を、どちらでもなければ子指を立ててパートナーに知らせ、自然へのきづきを共有するというものだった。ゆっくり歩き始めながら、草の影に白いきのこを見つけ、私はパートナーの斎藤さんに人指し指で指し示した。斎藤さんは笑ってうなずきながら、人指し指を立てていた。斎藤さんが指し示す方を見ると、背の高い草につたをからめたスイカズラが実をつけていた。

区間の終わりに来て、皆でそれぞれの発見を報告し合った。小谷さんの「変わった蜘蛛、6本足の蜘蛛がいました」との報告に、一同えっ?!と言って見に行った。葉の上のその蜘蛛を観察した降旗さんが、「あれ? 8本ありますよ。上の2本がくっついている」と言った。くすくす笑いながら、なんだか平和だなと感じていた。言葉のない世界から言葉のある世界へ戻ってきて、何かほっとした気持ちで声を出したものの、言葉は特に必要なものではない気がした。ペットボトルから渴いたのどへ水を流しこむ。少し疲れを感じた。反射的に腕時計を見ると、午後4時を回っていた。もう森に陽は入らず、少し暗くなって、森全体がしっとりと落ち着いたようになっていた。森が静まってきたなと思った。しかしそうではなく、静まってきたのは私たちの方なんだろうという気がした。

夕暮れの近づいた雑木林へ入っていった。降旗さんが聴診器をとり出し、私たちに順番で木の中を樹液がめぐる音を聞かせてくれた。木の鼓動は、ドクンドクンとはっきり聞こえた。それからペアを作って、互いに相手の木を選び、相手にバンダナで目隠しをしてその木に会ってもらい、後で目隠しを解いてその木を当ててもらおう、という「わたしの木」のアクティビティに入った。

私はカナダからやってきたアンナさんに手をひか

れ、枯れ葉の上をさくさくとしばらく歩き、「わたしの木」に触れた。木の幹は比較的細くざらつき、足もとの土はやわらかく、ゆるやかな斜面になっていた。元の場所に戻って目隠しを解かれ、振り向いて木を探してすたすた歩き始めた私は、アンナさんに「ちょっと方向が違いますね」と笑いながら流暢な日本語で修正され、改めて方向を定めて歩き出した。林の奥にある1本のきゃしゃな木が、まるで光を発しているように際立って見えた。「ああ、あれだ」と私は走って行って、その木に触れた。アンナさんが言っていた、その木は上の方で2つの枝に分かれているという特徴には、その後で気づいた。木はたしかに生きていて、鼓動を持ち、人と木は何か似た（少なくとも、どちらもネイティブアメリカンが言うところの'standing people'だ）生き物だという気がした。目を閉じてその木に会った時、知らずのうちに私たちは交感していたのかもしれない。そして目を開いてその木を見た時、外見ではなく木のなかの何か、いわば魂のようなものが、私を呼び寄せたように思えた。その何かを私は<光>と認識していた。

静けさが森を満たしていた。うす暗くなった林の木々の間に、半日しか時間を共有していないのに、親しみや懐かしささえ感じる人々の姿が見えた。ああこの森には、たしかに森の精がいるかもしれないと思えた。トトロのような。降旗さんが、アヒルの鳴き声の笛を鳴らした。

\*ネイチャーゲーム講習会に関するお問い合わせは、社団法人日本ネイチャーゲーム協会（TEL03-5376-2733）まで。

## ASLE-Japanのメーリング・リストに参加しましょう。

ASLE-Japanの会員が情報交換や事務連絡をするためのメーリング・リスト、aslejを運営しています。メンバーはASLE-Japanの会員に限らせていただいていますので、登録は手動で行なっています。メンバー登録ご希望の方はtuti@icarus.ilcs.hokudai.ac.jp(土永)までメールアドレスをお知らせください。その際に、ご自分のメールアドレスをASLE-Japanの会員名簿に掲載して公開してもかまわないか否かをお書き添え下さい。なお、この登録申し込み方法は変更されることがあります。

最新情報は<http://icarus.ilcs.hokudai.ac.jp/aslej/aslejml.html>でご覧下さい。

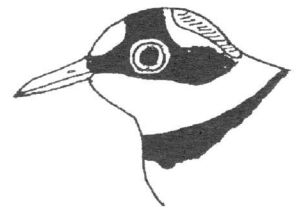
「文学」は「自然保護」の力になるか？

－「藤前干潟」問題を例として－

亀井浩次（「藤前干潟を守る会」／名古屋市立若宮商業高校）

桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る

『万葉集』所収の高市黒人の歌である。「干潟」に関する文学作品はけっして多くない。よく引用されるのはこの歌の主題は旅人の心理描写（干潟が干出して通行が容易になるのを喜ぶ）であって「年魚市潟」は背景にすぎない。とはいえ、1200年前の名古屋市南部の姿を詠んだものとして資料的な価値もあり、「愛知」という県名のもとにもなった作品として重要であることに変わりはない。読者の勝手な思い入れて「干潟」の姿を求めるのは筋違いであろう。



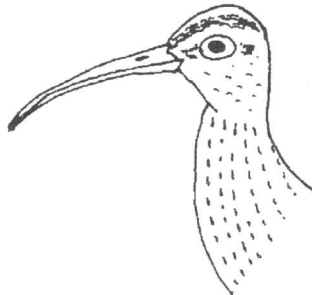
コチドリ

この歌からも知れるように、古代（～近世）、名古屋市南部は一面の干潟であった。濃尾平野の南部全体が湿地帯を形成しており、それに続いて広大な干潟が広がっていたと考えられる。織田信長に抵抗した長島の一向一揆や、東海道の「七里の渡し」（熱田～桑名間は陸路が使えないため海路が基本であった）等、すべてこのWETLANDが背景としてあった。低層湿原や塩性湿地など、さまざまなタイプの湿地がいりくんだ、大規模なウエットランドであっただろう。それが近世中期以降、主に農地拡大のために干拓がすすめられ、現在のような海岸線が形成されてきた。戦後の鍋田干拓・木曾岬干拓（干拓してみたものの使い道もなく、帰属問題でもめていたのは周知の通り）までで埋立もすべて完了し、なぜか名古屋港内にぽっかり残ったのが「藤前干潟」であった。そこはシギ・チドリ類、特にハマシギの国内最大級の飛来地（シベリアとオーストラリアを往復する際の中継地である）である。藤前干潟が名古屋市の廃棄物処分場計画の予定地とされて以来、保全運動と行政とのせめぎあいが続いてきたこと、そして昨年1月、処分場の着工を目前にして計画が撤回され、保全が確定したことは報道等でご存知であろう。

ここ数年、「藤前干潟を守る会」スタッフとして微力ながら活動が続けてきた私としてはまったく予

想外の喜びであった。とはいえ、この「藤前」保全の裏には、一昨年「諫早湾干拓事業」の反省があり、さらには次の「東京湾・三番瀬埋立計画」もひかえている。全国的な、さらには国際的な干潟保全の流れの中の一部であって、100 名ばかりの保全で喜んでもいられない、というのが客観的な現状といえる。

題にあげた「『文学』は『自然保護』の力になるか？」という問いかけについてだが、少なくとも私に関して言えば、藤前干潟埋立計画を撤回させるために、文学的なアプローチが何らかの効果を持ち得ないか、という期待感は相当強いものがあつた。全国の問題の現場には「何か新しいアプローチの仕方は・・・」と同様の悩みを抱く人が相当の数いるはずである。そのような現場にとって、「文学の純粋性」という主張がどれほど空虚に感じられることか。突き詰めていくとこれは、「ネイチャーライティング」の存在意義にもかかわってくる問題であろう。



チュウシャクシギ

結論めいたことを言うと、「藤前干潟」問題において、その解決のために「文学」が力になったとは言い難い。基本的にはそのような（文学を環境問題の現場と結びつけるという）発想自体が、方法論も含めて未整理であったことによると思われる。たとえばアメリカでいえば、「ミューがルーズベルトをヨセミテに連れて行き・・・」とか「『沈黙の春』を読んだケネディが・・・」といった例がよく引かれるが、それらはどのように分析され、整理されているのだろうか。そしてまたそのような研究の日本的な応用についての可能性はどうか。たまたま幸運にも「藤前」は「文学」の力をかりることなく解決に至ったが、国内をみてもまだまだ多くの問題をかかえる現場があり、それらの場では「文学」も何らかの役割を果たせるかもしれない。「藤前干潟」で得られた経験をベースに、もう少し実践的なアプローチの仕方を考たいと思っている。なお、読者の方でよい資料などご存知でしたらご教示いただけると幸いです。できれば日本語で・・・

皆様の投稿をお待ちしています。ご意見や日頃の活動、論文や雑誌記事、事件などご紹介下さい。

## 書誌情報

◆五十嵐敬喜、小川明雄『図解 公共事業のしくみ』（東洋経済新報社、1999）続々実施される無駄な巨大公共事業は21世紀の環境と財政を食いつぶす。600兆円にのぼり更に膨らむ一方の国と地方自治体の長期債務残高、止めどなく破壊される環境、土建国家日本のしくみが分かる本。自然、環境、あるいは独立行政法人等を論じるならば先ずこの本に目を通してからです。（加藤）

◆小沢徳太郎『21世紀も人間は動物である——持続可能な社会への挑戦：日本vsスウェーデン』（新評論、1996）持続不可能な道を惰性的・盲目的に突き進む日本社会に対し、希望のあるオルタナティブを提示する本です。（加藤）

◆Allen, Mary. *Animals in American Literature*. Urbana; University of Illinois P, 1983. アメリカの文学作品だけではなく世界文学における動物の表象についても触れた研究書。参考図書的にも利用出来るし、歴史的研究書としても読みやすい。（山城）

◆Blew, Mary Clearman. *Bone Deep in Landscape: Essays on Writing, Reader, and Place*. Norman, OK: U of Oklahoma, 1999. 著者の過去と現在の場所であるモンタナやアイダホについて回想しながらアメリカ西部の歴史——例えばルイスとクラークの探検など——私的な語りを混ぜながら展開していく。最近評価が高くなっている作家。（山城）

◆Gates, Barbara T., and Ann B. Shteir, eds. *Natural Eloquence: Women Reinscribe Science*. Madison, Wisc.: U of Wisconsin P, 1999. 女性科学者に焦点を当てて自然と科学の関係を違った角度から論じる批評論文集。例えば映画『霧の彼方に』で知られる女性霊長類学者Dian Fosseyの映画でもイメージがいかにイデオロギー的なものに満ちているか、など、興味深い批評論文集。（山城）

◆Galvin, James. *Fencing the Sky: A Novel*. New York: Henry Holt & Company, 1999. The Meadowsで知られる作家の初めての小説作品。一貫したテーマである牧畜業と場所の問題をアメリカ西部の歴史と重ね合わせながら詩的に描こうとする。（山城）

◆Kroeber, Karl. *Ecological Literacy Criticism: Romantic Imagining and the Biology of Mind*. New York: Columbia UP, 1993. 著者によるとイギリスロマン派の詩は本質的に政治的であり、詩人達も社会的な問題を急進的に取り組んでいるとする。独自のエコロジカルな批評はアメリカのエコクリティシズムとは一線を引く。（山城）



◆Lane, John, and Gerald Thurmond, eds. *The Woods Stretched for Miles: New Nature Writing from the South*. Athens: U of Georgia P, 1999. おそらく最初の現代アメリカ南部の風景を扱うアンソロジー。一八人の作家はBarry LopezやE.O.Wilson, Marilou Awiaktaなどの有名作家から地元の作家までバラエティーに富む。(山城)

◆Roorda, Randall. *Dramas of Solitude: Narratives of Retreat in American Nature Writing*. Albany: SUNY, 1998. ネイチャーライティングに表れる自然へのretreat(静修)の形態を語りの観点から研究。John Muir, John C. Van Dyke, Wendell Berry等の作家をむしろ構造主義的な立場で論じる。(山城)

◆Pyle, Robert Michael. *Chasing Monarchs: A Migration with to Butterflies of Passage*. New York: Houghton Mifflin Co., 1999. オカバマダラ(チョウの一種)について、鱗翅類の学者でもある著者が、ユーモアも交えながらその移動について思索を巡らせる。読後には確かにオオカバマダラに対する見方を豊かに変えてくれる。(山城)

◆Sarver, Stephanie L. *Uneven Land: Nature and Agriculture in American Writing*. Lincoln and London: U of Nebraska P, 1999. 環境倫理的な見地からアメリカにおける農業と自然の関係を歴史的に分析。扱う作家はEmersonやHamlin Garland等、視点は新しく、分析は委曲に富む。(山城、結城)  
——以下のものは Scott Slovic が最近新しく編集したクレドシリーズの本です。どれも編者による書誌情報や作家についての情報が充実しているだけではなく、更に編者と作家の個人的な関わりなどが伺えて興味深いシリーズです。(山城)

◆Bass, Rick. *Brown Dog of the Yaak: Essays on Art and Activism*. Ed. Scott Slovic. The Credo Ser. Minneapolis, MN: Milkweed, 1999. (山城、結城)

◆Rogers, Pattiann. *The Dream of the March Wren*. Ed. Scott Slovic. The Credo Ser. Minneapolis, MN: Milkweed, 1999. (山城、結城)

◆Sanders, Scott Russell. *The Country of Language*. Ed. Scott Slovic. The Credo Ser. Minneapolis, MN: Milkweed, 1999. (山城、結城)

◆Kittredge, William. *Storytelling and Belief*. Ed. Scott Slovic. The Credo Ser. Minneapolis, MN: Milkweed, 1999.

——更に以下の次の作品も同シリーズから近々刊行予定です。John Daniel, Alison Hawthorne Deming, Robert Michael Pyle, Ann Zwinger. (山城) -----

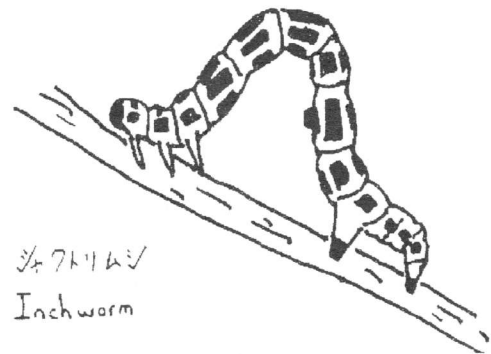
◆ケビン・ショート『ケビンの里山観察記』(講談社、1995) 自然環境の具体的事物に自分から近寄ってみる。(加藤)

◆内山節ほか『市場経済を組み替える』(農文協、1999) ローカルな営みと、世界市場を前提とする経済の間にいかなる関係を作りだしたらいいのか?(加藤)

◆多田道太郎編『環境文化を学ぶ人のために』(世界思想社、2000) 「環境」をめぐる言説はどんどん連鎖反応を起こしている。(加藤)

◆南研子著『アマゾン、インディオからの伝言』(ほんの木、2000) この元気さを見習おう。(加藤)

◆徳井いつ子『インディアンの夢のあと』(平凡社新書、2000) 力まないで読める本。(加藤)



#### 第11回エコクリティシズム研究会のおしらせ

日時: 2000年11月12日(日)

10:00~16:00

場所: 広島大学千田キャンパス(広島駅より  
広電で大学前下車)

1. 研究発表

2. 紹介批評書 William Cronon ed.,  
*Uncommon Ground: Rethinking the Human  
Place in Nature* (Norton, 1996)

3. 輪読 L.M.Silko, *Storyteller* (Arcade  
Publishing, 1981)

問い合わせ先: 広島大学総合科学部

伊藤詔子

81-824-24-6435(office phone)

81-824-24-0755(office fax)

shokoi@hiroshima-u.ac.jp

去る6月「アメリカの生活と文筆の中の食物と農業」と題するシンポジウムがASLE後援の行事として開催されました(2000年6月15-17日、米国メイン州ユニティ・カレッジにて)。文学、有機農業、食物とライフスタイル、民俗、言語、食料と環境、グローバル化、など自然や環境を論じる上で避けて通れない話題が沢山とりあげられた様子です。ASLE-JAPAN企画の秋のシンポジウム「国立公園の自然と里山の自然」と共通する関心がうかがえるように思います。それにしても、おいしそうなシンポジウムだったようです。主宰者アリソン・ウォーレスさんのご報告をご覧ください。

## ASLE Symposium on "Food and Farming in American Life and Letters" Deemed a Delicious Experience

--Allison B. Wallace, Unity College of Maine

"We were a small community right from the beginning," writes John Gourlie (Quinnipiac College), rather than individuals lost in the anonymity of a large conference. The weekend of June 15-17, John and twenty-four other scholars, teachers, writers, and farmers—hailing from parts of the northeast, South Carolina, Ohio, and as far away as Utah in one direction and England in the other—came together in Unity, Maine, to explore the significance of literature and language to our experiences of food and the farming that provides it. Held in the New England-style post-and-beam "Common Ground" conference center run by the Maine Organic Farmers and Gardeners Association (MOFGA), this symposium was ASLE's second effort to date at convening a handful of people deeply interested in a focused issue. (The first such meeting was the 1996 symposium on Pacific Rim literatures, held in Hawai'i.)

Papers presented ran the gamut from ecocriticism of canonical authors (Robert Frost, John Burroughs, Ken Kesey, Willa Cather, and Wendell Berry, for example) to critiques of the language employed by biotechnology; from personal narratives on farming, gardening, cooking and eating to an "eco-folkloric" study of the differing significances women of various ethnicities bring to their gardens in the American west; and from analyses of cookbooks to exposes of the genetically modified ingredients readily found in most natural-foods stores. During Q and A, over coffee breaks, and during meals—but of course!—symposium participants discussed these and many other related issues, from agriculture's heavy ecological toll to the

ontological strangeness of eating itself. If British writer William Ralph Inge is right in commenting that all of nature is a conjugation of the verb "to eat," then we covered quite a lot of natural grammar among ourselves in a very short time.

And speaking of eating—oh boy, did we ever! Praise and glory go to Unity caterer Melissa Bastien for her generous, banquet-style luncheons featuring such organic foods as peas, spinach, beets, potatoes, portabello mushrooms, rhubarb, strawberries, and the like, all procured from local farmers, a list of whom graced every table. Even the flowers—chiefly tall, pink and purple lupines from Melissa's garden—were organic and local. Add to all this the colorful tablecloths, "real" dishes and flatware, the tinkling of wine glasses around delectable hors d'oeuvre boards set out for the keynote authors' receptions, and it's no wonder one participant remarked afterward that the entire symposium felt like one long dinner party.

Other highlights from the weekend included readings by Jane Brox and Carolyn Chute. Brox is the author of *Here and Nowhere Else* and *Five Thousand Days Like This One*, nonfiction works on her farming family and the surrounding Merrimack (Massachusetts) Valley; Chute is the author of *The Beans of Egypt, Maine* and three subsequent novels, all of which concern rural northeasterners and the poverty imposed upon them by contemporary economic trends. The Fertile Mind Bookstore

(from nearby Belfast, Maine) made these books and many other literary treatments of food and farming available for purchase at two long display tables. MOFGA's Executive Directory, Russell Libby, led a walking tour of the 200+ acres of experimental garden plots surrounding the Common Ground Center, and local organic-vegetable farmer Tom Roberts presented a slide show on his efforts to educate (as well as feed) his customers in the importance of growing food in ecologically and socially responsible ways. Evenings included excursions to the Maine coast, as well as an impromptu visit by some of the group to the trial fields of world-famous Johnny's Selected Seeds (a JSS seed expert happened to number among the participants, and she happily obliged people's interest in touring the farm). On the symposium's final day, participants who were able to stay chose between, on the one hand, workshops and a solstice celebration sponsored by the local stoneworkers' guild, and on the other, a van trip to Morris Farm in Wiscasset, where a community non-profit group is demonstrating that a special family farm can survive the death of the last family member willing to farm it.

In a letter he sent me weeks afterward, symposium presenter Bill Conlogue (Marywood University) commented on the significance of the meeting to participants' efforts to widen the ecocritical lens, which some see as too narrowly focused on writing about wilderness and wildlife, to the exclusion of humanly inhabited environments: "We can't live in the world without using nature, and our use (and abuse) is most visible in our rural areas. And there are so many social justice questions at stake here. Ignoring food and farming as areas of literary study is to abandon our imaginative response and definitions of each to those who are more interested in commodifying than caring for them." I can think of at least twenty-four other scholars who couldn't agree more.

Some presentation titles and their authors:

(This is not an exhaustive list.)

"Gardens of Sustenance and Health," Tamara Fritze, Utah Valley State College.

"Full Circle: A Return to Natural Farming," Suellyn Shupe, Grailville Farm.

"Advocating Sentience: Ken Kesey's Fictional Farm," Bennett Huffman, University of Liverpool.

"Phases of Farm Life: The Agricultural Writings of John Burroughs," Jeff Walker, Vassar College.

"On the Importance of Owning Chickens," Mark Cladis, Vassar College.

"Unearthing the Georgic in American Literature," William Conlogue, Marywood University.

"Biting into an Orange," Tom Cheetham, Unity College in Maine.

"Creating Sacred Space," John Gourlie, Quinnipiac College.

"The Language of Biotechnology," Shepherd Ogden, The Cook's Garden.

"GMOs 4 U: Biotech Foods Where You Least Want Them--At the Co-op," Sydney Landon Plum, University of Connecticut.

"Witness," Linda Tatelbaum, Colby College.

"From the Food Chain to a Chain of Empty Signifiers: The Contest for Meaning (fulness)," Eric Ball, Ohio State University.



ASLE members interested in papers presented at the symposium would do well to watch upcoming issues of *Organization and Environment*, which is considering several of them for publication. For a complete list of paper titles and contact info on presenters, write me at <awallace@unity.unity.edu>.

--Allison B. Wallace, Unity College of Maine

## エコ・スマート・ホテル

上地 直美 (インディアナ)

アメリカ合衆国誕生の地、Philadelphiaに昨春(1999年)、『エコ・スマート・ホテル』と呼ばれるecologyを全面的に強調したホテル(Sheraton Rittenhouse Square Hotel in Philadelphia, PA)がオープンした。まず、ホテルに入ると、ロビーの前の12メートルの巨大な竹が目を引く。竹は、他のどの植物や木よりも空気の浄化能力に優れ、35%も早く酸素を生産するという。全館を通じて、この竹の効用を生かし、ロビーの壁材も客室同様に竹。壁の塗料は、殆どの有毒物質や揮発性物質(VOCs)を排除している。ホテルのフロントデスクやレストランのテーブルは、リサイクルのガラスと花こう岩。ロビーの床も、りり色がかかったブルーとホワイトのタイルで、滝の後ろのタイル同様、93%リサイクルの花こう岩でできている。また、ロビーの横のレストランは、有機農法で栽培された新鮮な野菜を使っただけの料理を心がけている。

客室は、24時間、新鮮な空気を循環させるため、高精度フィルターを使用し、空気中のカビ、花粉、細菌、ほこりなどの60%を取り除いている。温度調整も各自自由にできるように配慮されている。室内のカーペットは館内同様、丹念に加工が施され、悪臭や有毒物質を排除する特殊な合成繊維が使用されている。だがこれも100%リサイクル。更に、客室のテーブルや椅子も、廃船のパレット(荷台、床)のリサイクル。しかし、個々の部屋がゆったりとくつろげるように広めにできているのは魅力的だ。また、快適な眠りを提供するため、ベッドはシーツから枕カバーに到るまで、有機農法で採取された100% organic cotton(綿)で、毛布も100% pure wool(純毛)。浴室の石鹸、シャンプー、タオル、ローションに到るまで、細心の注意が払われ、無香料の自然製品を置いてくれている。一泊、\$87から\$150。季節や曜日によって値段が異なる。私が宿泊したのは、夏だったが、正面の公園からのさわやかな緑の風が樹々を吹き抜け、開け放したレストランの窓から、朝食にNatural Flavorを添えてくれた。ホテルはPhiladelphia空港から12 mile、タクシーで\$25、シャトルバスで\$8。アームトラック鉄道の30th St. 駅から、2 mile、タクシーで\$6。



コバネイナゴのメス

## ASLE-Japan 情報

### 1) 役員会

5月に役員会が開かれ、全国大会予定や次期代表および役員選出について話し合われました。

### 2) 会費

2000年度会費(年会費: 一般 5000円、学生 2000円)納入をお願いします。

### 3) 会誌編集委員会

「文学と環境」第3号は10月上旬発行の予定です。掲載論文8点、書評4点。

### 4) 出版関係の会員の方々へ

秋の全国大会会場に展示室を設ける予定です。関係書展示をご希望の方は事務局までご連絡下さい。



オオスズメバチ

## POSTSCRIPT

◆ 印刷関係設備が使えないため延び延びになっていた「ニューズレターNO.9」、ようやく発行できました。遅延をお詫びすると共に、ご寄稿下さった方々、発行・発送にご協力下さった方々に感謝します。

◆ フーム・・・するとエコ・スマート・カレッジというのも登場するかな。環境イマジネーションと共に消費も膨らむ一方のように見えて困ります。

♣ 遅ればせながら、日本でも農林漁業と環境の関係が注目され始めたのか、このところ関連する出版や活動の紹介が目立ちます。

♥ 名古屋では2005年愛知万国博覧会と里山保全の論議が連日、暑く、大相撲以上に激しく繰り広げられています。(KT)



ASLE-Japan  
文学・環境学会  
Newsletter No.9

2000年7月15日発行

【発行】ASLE-Japan/文学・環境学会  
事務局: 立教大学 観光学部  
野田研一研究室内  
〒352-0003 新座市北野1-2-26

E-Mail: noda@rikkyo.ac.jp

【編集】  
編集代表 加藤 貞通  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学言語文化部  
Tel. & Fax: 052-789-4188  
E-Mail: h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp